慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キリシタン版国字本の造本について：平仮名古活字本との比較を通して
Sub Title	Characteristics of Christian publications printed in Japanese characters : compared to Japanese old movable-type printings
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2016
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.51 (2016.) ,p.33- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20160000-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キリシタン版国字本の造本について
―平仮名古活字本との比較を通して―

佐々木　孝浩

はじめに

日本の印刷史や書物史のみならず、日本文化史上の大きな転換点が、古活字版の登場にあることは言を俟たないであろう。それまでの仏書と漢詩文にほぼ限定されていたものが、平仮名の古典作品を含めた多種多様な内容が出版されるようになったことは、極めて大きな意義を有しているのである。江戸時代のあらゆる面での文化的な発展は、商業出版の確立なくしてはありえないものであったことは忘れてはならないことである。古活字版は僅か半世紀ばかりで製作されなくなるが、出版という存在の価値と偉力を広く日本人に知らしめた功績は限りなく大きいのである。古活字版の半世紀は、日本の商業出版にとっての揺籃期であり、それが自立するための重要な時期であったのである。

古活字版を考えようとする時に避けて通れないのが、その技術を日本はどこから学んだのかという問題である。その解明はなかなかに難しいことであるのだけれども、本稿では従来とは少しだけ異なる視点から、この問題について再検討してみたい。

一　古活字版をめぐる議論　その一

古活字版の起源をめぐる問題というのは、ほぼ時期を同じくして日本に伝わってきた、文禄の役の際に略奪によってもたらされた、李氏朝鮮で発達していた活字印刷術と、イエズス会宣教師によってヨーロッパから伝えられた活字印刷術と、そのどちらの影響を受けたのかという議論である。

この問題に関する研究史を、簡潔に纏めつつ注目すべき見解を提示したのが、古活字版に関する多くの重要な業績を上げてきた、小秋元段氏のコラム「古活字版の起源とキリシタン版」（豊島正之氏編『キリシタンと出版』八木書店、二〇一三）である。これに拠りつつ補足や私見を加えて、この議論について簡略に説明してみたい。

古活字版の初例は、西洞院時慶の日記『時慶記』に記事が存するのみで、現物は伝わっていない、後陽成天皇が文禄二年（一五九三）閏九月に刊行させた『古文孝経』とされている。(1)

後陽成天皇は慶長二年（一五九七）にも二点を出版させており、それらに存する刊語はその技術の由来を語る重要な資料として知られている。その一つ『錦繡段』に存する、南禅寺僧玄圃霊三による同年七月付の活字で刷られた刊語には、「錦繡段者東皐天隠之所編而未有刊／行茲悉取載文字鏤一字於一梓棊／布諸一版印一紙纔改棊布則渠禄亦／莫不適用此規模頃出朝鮮伝達　／天聴乃依彼様使工摹写焉（以下略）」と記されている。もう一つの『勧学文』にも、「命工毎一梓鏤一字棊布之一版印之／此法出朝鮮甚無不便茲模写此書」とのやや簡略な刊語が存している。両者の表現の共通性は明らかで、共々に一字毎の木製活字で印刷したものであり、その技法は朝鮮から伝わったものであると明記しているのである。

また『補注蒙求』・『医学正伝』等の古活字版を刊行もしている、『信長記』・『太閤記』著者として著名な小瀬甫庵も、『永禄以来出来初之事』（朝倉景衡編『遺老物語』巻八所収）において、「一字版　是はかうらい入有し故也」と記しており、ここでも古活字版が朝鮮活字印刷の影響下に始ったことが記されているのである。

これらにより古活字版の技術が朝鮮伝来であることは明白であると言えそうなのであるが、事態を複雑にしているのは、キリスト教宣教師達が西洋から持ち込んだ活版印刷機によって、

早くも天正一九年（一五九〇）に日本で活字印刷を行っているという事実である。キリシタンによる出版は、アルファベット活字のみならず漢字・片仮名・平仮名などの国字の活字のものもあり、現在知られているものだけで三〇種を越える刊行物がある。近年このキリシタン版の研究が活発になるとともに、古活字版の起源がこの西洋活字印刷にあるとする見解も複数提示されるようになってきたのである。

この説の濫觴として注目されるのが、幕末のイギリス外交官として名高いアーネスト・サトウ（一八四三～一九二九）と、『広辞苑』の編者として有名な言語学者新村出（一八七六～一九六七）の見解である。これについては小秋元氏のコラムにも纏められているが、近時の注目すべき論文として、藤本幸夫氏「日本古活字版と朝鮮及び西洋印刷術―アーネスト・サトウと新村出の所説を中心に」（『新村出記念財団設立三十五周年記念論文集』臨川書店、二〇一六）がある。

サトウは、私家版の *The JESUIT MISSION PRESS IN JAPAN, 1591-1610*（1888）の序文に、「It seems possible therefore, though perhaps not very probable, that the Japanese may have learnt the advantages of typography from the missionaries, and not from the Coreans.」と記している。かなり曖昧な表現であり、小秋元氏は「蓋然性は乏しいと述べている」と解され、藤本氏は「断定的ではないものの、日本古活字版への西洋活字印刷術の影響を考えていたと結論される」と解釈しておられる。可能性を全く否定した表現ではないと考えるが、ともあれ、キリシタン版と古活字版の関連性に着目していたことは注目できるのである。

新村出の見解は小秋元氏がまとめておられるものの、コラムであった為に詳しくは言及されていないので、その点を補足しながらなぞってみたい。新村は「天草出版の平家物語抜書及び其編者につきて（二）」（『史学雑誌』二〇―一〇、一九〇九・一〇、「天草吉利支丹版の平家物語抜書及び其編者」と改題して『新村出全集五』（筑摩書房、一九七一）所収、以下引用は全集に拠る）において、「本邦活字版の権輿と西洋印刷術の伝来とが、略々年代を同じうすること、即ち同時代に活字印刷術が南蠻と高麗との両方より伝はりしことは、実に千載の一遇といはざるべからず。英のサトウ氏、独の某氏（ミュンステルベルヒ氏と覚ゆ）等が、日本活字の起源は西洋にありと考え得べしとのように説きたるは謂れなきにもあらず[2]」と、サトウの消極的な意見に賛同を示している。

続く、「活字印刷術伝来考」（『藝文』三―九、一九一二・九、「活字印刷術の伝来」と改題して『新村出全集五』所収）においては、「慶長二年朝鮮活字に摹して『錦繡段』が出来た様に、慶長十年以後の平仮名活字は其以前の吉利支丹活字に何も負ふ所がなかつたらうか」、「要は欧西の技の九州の一端より東漸したことは、其時代の風潮より察すればpossibleだといふに止まる」等と、平仮名古活字版が吉利支丹版の影響を受けた可能性を示唆しているのである（小秋元氏はこれについて「キリシタン版の影響は平仮名古活字版に限定されるという見方を示すようになる」と纏めておられる）。

さらに「我国旧時の活字本」（『六条学報』一三〇、一九二一・一、『全集八』（一九七二）所収）では、「かくの如く朝鮮系と西洋系との二つの活版述が我国に入つた差は僅か三年であります故に、西洋の一二の学者は日本の古代の活字印刷術は西洋から入つたものだと云つてゐます。先の英国の公使サー・アーネスト・サトーは婉曲に其の意を洩らしてゐます。又独逸のミュンステルベルヒ氏はもっと明かに、此の印刷文明は西洋から日本に入つたと云つてゐます。けれども朝鮮系の活版術の発達を調べ又文禄年代の記録をたどつて見れば、それは誤りであることが知られます。西洋系のものは二三年前にはひる事ははひつたが九州の一角に止まつて慶長十年以前には京都にはひらなかつた事は明かであります」と述べている。これを小秋元氏は「キリシタン版起源説そのものを退けるにいたる」と整理されている。しかしながら、仏教徒向けの講演であった故もあって、キリスト教の影響には積極的に言及しなかったものと思われ、慶長一〇年以降の平仮名古活字版についても触れていないので、新村の言説はそれ程変化していないと考えることもできるのではないだろうか。

新村のキリシタン版の古活字版への影響に関する見解は、年代的にも『日本吉利支丹文化史』（地人書館、一九四一、『全集六』（一九七三）所収）を以て代表としてもよいように考える。その第一章第二節「活字印刷術の伝来」の「吉利支丹の影響」には、「吉利支丹版が日本印刷界へ及ぼした影響如何に就いて一言する。後の国字本に用ひられた活字は行草体の漢字・平仮名の精巧な金属製であつたと考へられ、その書風は必ずしも一様ではないが、御家流風のうちに別種の趣きのある優雅なもので、嵯峨本や光悦本の端麗な字体を想起せしむるものがある。従つて慶長中期の本阿彌光悦・角倉素庵等を中心として京都に

行われた嵯峨本・光悦本をはじめ平仮名本と吉利支丹版の平仮名との間に類似があるところから、京都の平仮名活字に用ひられた連続活字も、耶蘇会刊行書の影響をうけたものと想像せられ、中央の出版術への吉利支丹版の刺戟乃至影響が考へられる。又一面吉利支丹版が教徒以外には用ひられず、且つ主に九州で刊行されたといふ宗教的及び地理的関係から見て、吉利支丹版は中央の活字印刷術に影響を与へなかつたと説くものもある。なほ詳しくは後考を俟ちたい」とあるのがそれである。

また藤本氏が注目されているように、新村が同節「吉利支丹版の装幀」において、キリシタン版のローマ字本が「鳥ノ子紙に印刷して西洋綴」であるのに対し、国字本は「大体美濃紙に印刷し袋綴」であることを指摘し、「丸善が海外より回収せる『ぎや・ど・ぺかどる』は裏表紙だけは完全に保存せられた雲母で五七の桐の花模様を描き出したもので、光悦本、嵯峨本の類を聯想せしめるものであり、原装幀を知り得る貴重な資料でもある」と記している。藤本氏は、この本が昭和七年（一九三二）にイタリアのトリノから購入されたもので、現在は天理図書館所蔵になっていることを指摘され、「先生所説の如く、キリシタン版印刷者と嵯峨本・光悦本印刷者間の関係を想定しても良かろうと思われる」、との見解を示しておられるのである。

古活字版とキリシタン版の関係について本格的に言及した人物として、やはり新村出は重要な位置を占める人物であると評価することができよう。

二　古活字版をめぐる議論　その二

新村以後の状況も、小秋元氏のコラムが的確に説明してくれる。ここでも補足しながら確認してみたい。

古活字版研究の第一人者であった川瀬一馬は『増補古活字版の研究』（ABAJ、一九六七、最初の版が安田文庫から刊行されたのは一九三七年である）において、古活字版がキシリタン版の影響を受けた可能性を示す存在として注目されてきた連綿活字（連続活字とも、この件については後述）も、「版下書きの関係から、自然に其の軌を一にする結果を生じたものとも解し得る事であつて、必しも有力な手掛りとはならないと思はれる」（原文の漢字は旧字体）とし、「推論の域を出でぬのであるが」と前置きして、「西欧の活字印刷術は宗教的・地理的関係に制約せられて、我が国中央の印刷界に殆ど影響を与へず終つたと

考へる事も無理ではなからうと思ふ」との見解を示している。川瀬の見解は強い影響力を有したものと思われる。

こうして朝鮮版起源説が定説化した観のあった学界に一石を投じたのは、大内田貞郎氏で、高部苹子氏と共著の「朝鮮古活字版に想うこと―特に活字の形状と植字版を中心に」（『ビブリア』八九、一九八七・一〇）において、中国で二通りの活字印刷技法、活字と固着剤を用いる畢昇の技法と、活字の大小高低を均一・規格化した活字で植字する王楨の技法とがあることを説明した上で、「朝鮮朝の伝統的な活字印刷技法は高麗末・朝鮮朝を通して、畢昇の技法（固着剤を用いる植字方式）が継承されてきた」らしいことを確認し、日本の草創期の古活字版も畢昇の技法を用いたと考えられるものの、嵯峨本『伊勢物語』を初めとする漢字・平仮名交り文の古活字版は「王楨方式との関連を感じさせられ」、さらにこの方式が「西欧印刷技法との類縁を思わせる」と述べている。

また大内田氏は、辻本雅英氏との共著「本館所蔵『君臣図像』の版種について」（『ビブリア』九三、一九八九・一〇）の注6においても、前記論文での見解をより詳細により推し進めて説明されており、「古活字版の四注方式（腰高活字）は、或は西欧の組版技法のヒントを得て、わが国人が独自にあみ出した技法だったとはいえまいか」とも述べておられる。

こうした見解と同じ立場を取られたのが森上修氏で、「慶長勅版「長恨歌琵琶行」について（下）―わが古活字版と組立式組版技法の伝来」（『ビブリア』九七、一九九一・一〇）において、やはり李朝活字版の方式を丁寧に検討された上で、「わが国における古活字版の植字組版技法は、いずれも李朝古活字版のそれとは根本的におよそ異質のものであったと考えたい」とされ、「わが国の古活字版はやはり組立式の活版原理に基づくキリシタン版の組版技法を見倣い、これを採り入れたとみるのがむしろ穏当ではないであろうか」との見解のもとに、キリシタン版と日本の古活字版の印刷技法をも入念に検討され、「わが国の古活字版は〈キリシタン版〉の〈組立方式〉の組版技法を採り入れ、摺刷法に関しては伝統的な整版方式を伝襲する和欧混交の印刷技法を統合した異色の活字印刷であったと言えるのではないだろうか」との結論をまとめておられるのである。

このような流れの中、大内田氏は「きりしたん版について」（『本と活字の歴史事典』柏書房、二〇〇〇）において、本格的にキリシタン版を中心に据えて論じられ、「「古活字版」への「連綿

体」の導入はまさに、それ（稿者注：キリシタン版）に倣ったものと理解しておきたい」と、キリシタン版が古活字版に与えた影響をかなり断定的に述べておられるのである。また「きりしたん版」に「古活字版」のルーツを探る」（『活字印刷の文化史』勉誠出版、二〇〇九）においては、キリシタン文献を丹念に調査されて、一五九〇年七月の「日本イエズス会第２回協議会議事録」に「書物の編纂、出版にも関係ある古くて関係ある十名の日本人神弟」との記述を見いだし、一五九九年二月二〇日付のフランシスコ・ロドリゲス書翰に、「三十人の土着人が長崎の印刷所で植字工として又タイプ彫工として働いている」と見えることや、『ばうちずもの授けやう』の版心が五山版に同一形式を見いだせることなどから、嵯峨野で五山版出版に携わっていた技術者が、キリシタン版の日本文字の印刷を担当し、後に古活字版の嵯峨本の刊行にも携わったとの説を提示されている。

このように、古活字版の起源が朝鮮活字版ではなく、キリシタン版であるとする説が有力になり、『ひですの経』（八木書店、二〇一一）が刊行された際には、解説者でもある豊島正之氏はその宣伝文「四百年前の金属活字印刷を解明」において、「日本古活字版の祖を、版式から（通説の朝鮮活字版ではなく）キリシタン版に辿る説は、もはや事新しく説くまでもなく」とまで書かれたのである。

そうした流れに一石を投じたのが他ならぬ小秋元氏のコラムであり、朝鮮活字版は「固着方式」で、古活字版はキリシタン版とともに「組立方式」であるので、両者には技法的に大きな断絶があるとする従来の認識に対して、『世宗実録』に、李朝官版の固着剤に頼らない印刷技法のことや、組立方式に利用したらしい四隅を平正にした活字に関する記述があることなどから、印刷技法のみで古活字版の起源を考えることは困難であることを改めて指摘されたのである。更に氏は、初期の古活字版の字体が朝鮮版の字体の影響を受けていること、古活字版の表紙の文様に朝鮮版のそれを受け継ぐものが少なくないことなどを指摘され、この問題の再考を促されたのである。

またこの小秋元氏の意見に足並みを揃えるかのように、李載貞氏（李仙喜氏訳）は「韓国国立中央博物館所蔵活字の意義」（『アジア遊学一八四　日韓の書誌学と古典籍』勉誠出版、二〇一五・五）において、韓国国立中央博物館所蔵の活字の中にある一四六一年以前に鋳造されたハングル活字が、駿河版銅活字と類似した形態を有していることを確認され、「今まで日本の

古活字本の起源について論じる場合には、主に朝鮮後期の活字と組版方式をもて論じていたが、比較対象資料が適切か否か注意する必要がある。朝鮮前期の活字であり、日本の駿河活字と外形が類似しているこの乙亥字併用ハングル活字は、今後日韓の古活字印刷の比較研究において重要な資料になると期待される」と述べられたのであった。

さらに、日本語の書記様式と印刷との相関関係を研究しておられる鈴木広光氏も、「漢字仮名交り文の古活字版を論じる理由」（『日本語活字印刷史』名古屋大学出版会、二〇一五）において、大内田・森上両氏の説を紹介された上で、朝鮮活字版に組立式もあったことが推定された今となっては、「古活字版の起源や影響関係をめぐる議論も振り出しに戻ることになった」と現状を整理され、「キリシタン版に刺激を受けて古活字版でも漢字仮名交りのテキストが摺刷されるようになったという可能性を否定するわけではない」が、「両者の連続性を認めることに躊躇する」と述べられ、その理由として、「キリシタン版は鋳造活字、古活字版は木駒に彫った彫刻活字と、活字の制作方法に違いがある」ことや、「文字を活字に載せるためのプロセスや言語文字に対する認識のあり方についても相当の懸隔があるように思われる」と、国語学者としての立場からの認識を示しておられるのである。

極大まかに関連する説を整理しただけでもこれだけの長さになってしまったが、古活字版の起源をめぐる問題が今現在に到っても混沌たる状況であることは理解いただけたことと思う。

キリシタン版や朝鮮活字印刷の専門家でもなく、出版技術や国語学にも暗い稿者が、敢えてこの問題に首を突っ込んでみたくなったのは、先述した新村出の「吉利支丹版の装幀」で指摘された、雲母で五七の桐の花模様を描き出した『ぎや・ど・ぺかどる』の裏表紙の存在に興味を惹かれたからに他ならない。

三　キリシタン版国字本の装訂

古活字版の起源が朝鮮活字印刷にあるのか、キリシタン版にあるのかについては、先に確認したように、主として組版方式と連綿活字（連続活字）とに焦点を絞った議論がなされてきた。これを更に推し進めることは勿論大切であるが、どちらも確実な根拠となりにくい状況がある以上、新たな視点からこの問題を見つめ直す必要があるのではないだろうか。

そのように考えて稿者が気になるのは、国字本キリシタン版と平仮名古活字版の造本面での共通性なのである。先に触れた『ぎや・ど・ぺかどる』の雲母模様の表紙の存在を知った目で見ると、このことが非常に気になるのである。

具体的な考察に入る前に、ここでも先学の研究成果に拠りつつ、簡略にキリシタン版の歴史を確認しておきたい。

天正一〇年（一五七九）に派遣された天正遣欧使節の同行者らが、リスボンで入手したプレス式印刷機や活字などを携えて日本に戻ってきたのは、同一五年九月一九日の秀吉によるバテレン追放令の余波が収まった、同一八年七月のことであった。もたらされた活版印刷機は加津佐のコレジオに設置されたが、文禄元年（一五九二）にはコレジオの移転に伴い天草の河内浦に移され、慶長二年（一五九七）にやはりコレジオの移転と共に長崎に移動している。そして慶長一九年のキリシタン追放令により、印刷機はマカオに移送され、日本における四半世紀に及ぶ活動を終えたのである。

この間、西洋式活版印刷機を用いない京都での出版を含めて、キリシタン版は三二種が刊行されていることが確認されており、その内の一三種が日本語の活字を用いた所謂「国字本」である。豊島氏が「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」で説かれるように、キリシタン版は紙と装訂により二種に分けることができ、それは表記系・文字組とも対応しているのである。その二種の整理について引用させていただきたい。

ラテン文字（欧文・和字ローマ字） 横組、「鳥の子」紙、両面印刷、四折（quarto）又は八折（ocyavo）

漢字仮名交じり（「国字本」） 縦組、美濃紙、片面印刷袋綴じ、美濃判又は中本（美濃判半裁）

アルファベット活字を用いたものは、料紙こそ和紙の「鳥の子」を用いているものの、装訂や判型は当時の西洋の印刷物とほぼ同様であったのに対し、日本語の活字を用いたものは、当時の袋綴写本と同様の造本がなされていたようなのである。この国字本の造本について詳しく検討してみたい。[3]

ア　国字本一覧（刊行順）

キリシタン版の国字本一三種は以下の通りである。通し番号をつけて推定も含めた成立の順に掲げておきたい。印刷場所や印刷者も添えておく。

①サルベ・レジィナ他断簡（片仮名・国字最初カ）
②どちりいな・きりしたん（一五九一・加津佐刊カ）
③祈禱文断簡（一五九一頃カ）
④ばうちずもの授けやう（一五九三頃・天草刊カ）
⑤落葉集（一五九八・長崎・日本学林刊）
⑥サルバトール・ムンヂ（同）
⑦ぎや・ど・ぺかどる（一五九九・長崎・日本学林刊）
⑧和漢朗詠集（一六〇〇・長崎・日本学林刊）
⑨おらしよの飜譯（一六〇〇・長崎・後藤登明宗印活版所刊）
⑩どちりな・きりしたん（同）
⑪こんてむつす・むんぢ（一六一〇・京都・原田アントニオ印刷所刊）
⑫太平記抜書（一六一一以前カ）
⑬ひですの經（一六一一・長崎・後藤登明宗印活版所刊）

①「サルベ・レジィナ他断簡」のみは片仮名活字で、やや性格が異なり断簡でもあるので、一先ず以下の考察からは除外することとしたい。

イ　国字本の大きさ

それでは続いて、断簡である①③を除いた一一点について、その大きさを確認しておきたい。各項の末尾に調査対象となった本の所蔵先を付記しておく。

②どちりいな・きりしたん（一五九一）　二四・二×一八・一糎（バチカン図書館）
④ばうちずもの授けやう（一五九三頃）　二五・三×一七・五糎（天理図書館）
⑤落葉集（一五九八）　二七・〇×二三・〇糎（イエズス会本部）
⑥サルバドール・ムンヂ（同）　一八・三×一二・五糎（カサナテンセ図書館）
⑦ぎや・ど・ぺかどる（一五九九）二七・六×一九・一糎（バチカン図書館）
⑧和漢朗詠集（一六〇〇）　二五・二×一八・六糎（サン・ロレンソ文庫）
⑨おらしょの翻譯（同）　二〇・五×一三・〇糎（天理図書館）

⑩どちりな・きりしたん（同）　二五・五×一八・二糎
（カサナテンセ図書館）
⑪こんてむつす・むんち（一六一〇）　二六・八×一九・三糎（天理図書館）
⑫太平記抜書（一六一一以前）　二六・〇×一九・五糎
（天理図書館）
⑬ひですの経（一六一一）　二八・一×一九・六糎
（ハーバード大学ホートン図書館）

ここに挙げたものの多くは、和綴の上から革表紙や厚紙保護表紙を加えられており、その際や補修時に化粧裁ちがなされた可能性は高い。従ってこれらの数値は原体よりやや小さくなっているものが多いと考えられるが、ここでの考察に特に支障はないであろう。

豊島氏の整理のように、⑥⑨が中本で、それ以外は大本（美濃判本）と分類できる大きさである。とはいえ、大本に分類できるものは、高さが①二四・二糎から⑬二八・一糎、幅が④一七・五糎から⑤二三・〇糎とかなりの差が認められる。入手できた紙のサイズの差や、改装や補修の手の入れ方の違いなどを考慮すれば、一応同一の判型と言うことは許されようか。[4] 念のために付言しておけば、そもそも大本や中本といった規格は、主として江戸時代の整版印刷の版本を対象とした判型の整理であって、キリシタン版に当て嵌めて考えるのは適当ではないとも言える。しかしながら、ラテン文字の横組みキリシタン版で、西洋の印刷物の二つの大きさの規格が用いられていることからしても、国字本も二つの規格、しかも小さいものは大きいものの半分の大きさとして製作する意識があったことは疑う必要はないであろう。

ともあれこれらの大きさを相対化するために、嵯峨本古活字版の大きさと比較してみると、慶長八年（一六〇三）以前の刊行とされる嵯峨本第一種の『徒然草』は二八・〇×二一・〇糎（銚子円福寺蔵）、慶長一三年（一六〇八）刊の嵯峨本第一種の『伊勢物語』は二七・〇×一九・三糎（同、ロナルド・ハイド旧蔵本）であり。同じくらいの大きさであることが確認できるのである。

ウ　キリシタン版国字本の表紙

それでは国字本の表紙はどのようなものであろうか。原装であったり、後補の表紙の下に原表紙があるものに限定して確認

してみたい。

②どちりいな・きりしたん（一五九一）　丹色地金箔散し（バチカン図書館）

⑤落葉集（一五九八）　雲母刷七五大桐文（イエズス会本部）

図書館・ライデン大学図書館）　薄茶色（フランス国立

⑥サルバドール・ムンヂ（同）　藍色（カサンテンセ図書館）

⑦ぎや・ど・ぺかどる（一五九九）　紺紙地金泥菊花文（バチカン図）

理図書館・マノエル文庫）　雲母刷七五大桐文（天

⑧和漢朗詠集（一六〇〇）　水色（サン・ロレンソ文庫）

⑩どちりな・きりしたん（同）　薄茶色（カサナテンセ図書館）

⑪こんてむつす・むんち（一六一〇）　茶色（天理図書館）

⑫太平記抜書（一六一一以前）　薄茶色（天理図書館）

⑬ひですの経（一六一一）　茶色（ハーバード大学ホートン図書館）

青系や茶系の表紙が多いのは、当時の写本や古活字版にも共通する特徴であると言えよう。注目されるのは、イエズス会本部蔵の『落葉集』や、天理図書館とポルトガルのヴィラ・ヴィソーザにあるマノエル文庫蔵の『ぎや・ど・ぺかどる』が、白地に雲母刷の七五大桐文の共通の表紙を有していることである。この表紙こそ新村が注目したものだが、天理本以外にも認められるのみならず、前年刊行の別作品でも用いられていることが確認出来るのである。

同じ文様が見いだせる訳ではないが、雲母刷文様の唐紙を表紙に用いたものとしては、慶長八年（一六〇三）年までには刊行されていた古活字版の『史記』や、所謂「光悦謡本」など、角倉素庵が製作した嵯峨本の一群でよく用いられているのは有名である。

林進氏はそのコラム「角倉素庵とキリシタン版・古活字版・嵯峨本」（『キリシタンと出版』）において、天正一七年（一五

八九）に長谷川等伯が描いた大徳寺三玄院の「水墨山水図襖」の襖紙（高台寺円徳院現蔵・重要文化財）にも、類似の雲母刷文が施されていることを指摘しておられる。林氏は今問題とする『落葉集』と『ぎや・ど・ぺかどる』の表紙が「既成の襖の唐紙」を用いたもので、「素庵の表紙装訂に倣ったものではないか」と推測されてもいる。氏は、慶長四年（一五九九）のものと推定される素庵宛藤原惺窩書状に「四書并周詩」が「装背表紙別而見事」等と記されていることから、「慶長のはじめ頃に、素庵は既成の襖用の唐紙を転用し、のち慶長四年頃に新たに雲母刷文様料紙を作らせ、それを表紙装訂に用いたと推測」されたのである。書状に見える慶長四年時の『四書』の表紙が雲母刷文様のものであったと確定できる訳ではなく、時期的にあまりに近接してもいるので、素庵に倣ったと言うためには、より確実な証拠を求める必要があるであろう。

もう一点注目されるのが、やはり一五九九年刊の『ぎや・ど・ぺかどる』のバチカン図書館蔵本が有する、紺紙地金泥菊花文（右上に虻も描かれる）表紙（上冊表）である。紺紙地に金泥で細密な文様や図像などを描くのは、平安時代の写経の表紙や見返しなどにもある伝統的なものであり、室町時代から江戸初前期の綴葉装や袋綴写本にも多く見られるものである。この本は見返しに、また別種の大桐に丸文などを雲母刷し雲霞を加えた華美な装飾紙を用いてもおり、献上用に特に豪華に仕立てられたものと考えられる。

エ　キリシタン版国字本の原題簽

国字本に原題簽が存するものは以下の通りである。

⑤落葉集（一五九八）　左肩丹色地〔銀泥〕草文題簽「落葉集」墨書（イエズス会本部[5]）

⑦ぎや・ど・ぺかどる（一五九九）　左肩金紙題簽「きやとへかとる」墨書（バチカン図書館）　左肩丹色題簽「きやとへかとる」墨書（マノエル文庫）

⑩どちりな・きりしたん（一六〇〇）左肩丹色題簽「とちりなきりしたん」（カサナテンセ図書館）

⑪こんてむつす・むんち（一六一〇）左肩子持枠刷題簽「こんてむつすむんち」（天理図書館）

⑬ひですの経（一六一一）　左肩題簽「ひてすの経」墨書（ハーバード大学図書館）

この五種六点の題簽の位置は全て表紙左肩で共通している。題簽は中央にある場合もあるが、左肩の方が格が高いと考えられ[6]、キリシタン版国字本もそのことを意識していた可能性は高い。また、丹色題簽が『落葉集』・『ぎや・ど・ぺかどる』・『どちりな・きりしたん』と三点確認できるが、これも室町期から江戸前期にかけての綴葉装・袋綴の写本に多く見かけるものである。更に『落葉集』のように題簽に銀泥や金泥等で下絵が加えられていることも少なくないのである。

バチカン図書館蔵の『ぎや・ど・ぺかどる』のような、金紙の題簽も丹色ほどではないが折々見受けるものである。ちなみに、題簽を異にする二点の『ぎや・ど・ぺかどる』の外題の文字は同筆であろう。表紙や題簽が異なっていても、同じ場でそれらが加えられたらしいことが推察されるのである。

一六一〇年刊の『こんてむつす・むんち』のみは刷題簽で、二重の子持枠を有しており、国字本として極めて特異なものであるが、これのみが京都の原田アントニオ印刷所で刊行されたことと関係していると思われる。枠のある刷題簽は慶長八年（一六〇三）以前刊の嵯峨本『史記』の一群（内閣文庫本・東洋文庫本など）等にも確認できるように、漢字の古活字版にまま見られるものであり、原田アントニオの素性は不明ながら、京都という場所からしてもこのようなものを参考にしたと考えられよう。ただし、古活字平仮名本では題簽のあるものは、慶長元和頃刊とされる『大鏡』のような例外はあるものの、無枠が基本であるようなので、それらと異なることは注意されるのである。

オ　キリシタン版国字本の表紙と題簽

それでは、国字本の表紙全体について整理してみたい。

⑤落葉集（一五九八）　雲母刷七五大桐文表紙・左肩丹色地〔銀泥〕草文題簽（イエズス会本部）

⑦ぎや・ど・ぺかどる（一五九九）　紺紙地金泥菊花文表紙・左肩金紙題簽「きやとへかとる」墨書（バチカン図書館）　雲母刷七五大桐文表紙・左肩丹色題簽「きやとへかとる」墨書（マノエル文庫）

⑩どちりな・きりしたん（一六〇〇）　薄茶色表紙・左肩丹色題簽「とちりなきりしたん」（カサナテンセ図書館）

⑪こんてむつす・むんち（一六一〇）　茶色表紙・左肩子

持枠刷題簽「こんてむつすむんち」（天理図書館）

⑬ひですの経（一六一一）　茶色表紙・左肩題簽

「ひてすの経」墨書（ハーバード大学図書館）

繰り返しになるが、作品と刊行年が異なりながら表紙と題簽を同じくするものがあることは、国字本の造本を考える上で極めて注目される。バチカン図書館蔵の『ぎや・ど・ぺかどる』を含めて、これらが豪華な仕立てであることを確認しておきたい。これらに比べると、一六〇〇年以降のものは、次第に質素になっていくようである。事例が少ないので、その理由を説明するのは困難だが、古活字版も初期のものほど豪華で次第に質素になっており、同じ傾向を示すのは興味深い。

前述の如く、子持枠刷の題簽を有する『こんてむつす・むんち』は例外的であるが、全体的にこれらの表紙の有様は当時の平仮名写本との共通性が高いように思われるのである。

四　キリシタン版国字本の版式

書物の第一印象を決める外形についての検討に続けて、出版物としての特徴について検討してみたい。詳しい印刷技法についてではなく、あくまでも一見して判断できる範囲での考察であることは断っておきたい。

カ　キリシタン版国字本の匡郭と版心

先ずは、本文を囲む枠である匡郭と、印刷面の中心の折目となる部分の版心[7]についてである。

②どちりいな・きりしたん（一五九一）無辺・柱題・丁付（バチカン図書館）

④ばうちずもの授けやう不明（一五九三頃）無辺・中黒口三段黒魚尾（下下上）・丁付（天理図書館）

⑤落葉集（一五九八）　単辺有罫・中黒口黒魚尾・丁付（イエズス会本部）

⑥サルバドール・ムンヂ（同）　単辺・中黒口黒魚尾・丁付（カサナテンセ図書館）

⑦ぎや・ど・ぺかどる（一五九九）単辺（「集字」部分は罫線あり）・中黒口黒白混用魚尾・丁付（バチカン図書館）

⑧和漢朗詠集（一六〇〇）　単辺・中黒口黒魚尾・丁付（サン・ロレンソ文庫）

⑨おらしょの翻譯（同）　単辺・中黒口黒魚尾・丁付（天理図書館）
⑩どちりな・きりしたん（同）　単辺・中黒口黒魚尾・丁付（カサナテンセ図書館）
⑪こんてむつす・むんち（一六一〇）単辺・中黒口白魚尾・丁付（天理図書館）
⑫太平記抜書（一六一一以前）　単辺・中黒口白魚尾・丁付（天理図）
⑬ひですの経（一六一一）　単辺・中黒口白魚尾・丁付（ハーバード大学図書館）

こうして時代順に並べてみると、幾つかの画期があることが判る。先ず匡郭に関しては、最初の二つはこれがなく、他は全て四周単辺のものが存している。その無辺の二点も版心の様子は異なっており、②『どちりいな・きりしたん』は装飾的な十字文の付いた柱題と丁付けがあるのみだが、④『ばうちずもの授けやう』は黒魚尾が三つあり、その上下は中黒口になっている。魚尾の向きは上から順に下・下・上となっており、二つ目と三つ目の魚尾の間に丁付も存しているのである。

単辺の匡郭を有するものは版心の上下が中黒口となっており、丁付がある点も含めて④と共通するが、魚尾は向かい合った二つのみである点で異なっている。また魚尾は最初は黒魚尾であったものが、⑦『ぎや・ど・ぺかどる』では白魚尾も混用されている。その後また黒魚尾のみとなって、⑪『こんてむつす・むんち』以降は白魚尾のみと変化するのである。

匡郭の有無の違いは、使用されている活字の違いと連動するものである。平仮名国字本は活字の大小により大きく二つに区分されている。その内の大型文字本は匡郭がないものなのである。[8]

⑤『落葉集』以降は小型活字本であり、魚尾が黒か白かで大きく二分できる。その境目は⑩『どちりな・きりしたん』と⑪『こんてむつす・むんち』との間である。両者は刊行年が一〇年も隔たっており、この間に変化があったものと考えられ、⑪が京都での刊行であることと関連するのかもしれない。⑦『ぎや・ど・ぺかどる』が黒白混用している理由は不明である。

それではこの様な版式の変化は何を意味しているのであろうか。その事を考える上でヒントになりそうなのが、唯一の片仮名活字本である①「サルベ・レジィナ他断簡」である。国字本

の最古かとされ、マカオで印刷された可能性も指摘されるものの、注目される存在であることは確かである。これらはサンロレンソ文庫蔵『和漢朗詠集』とカサナンテ図書館蔵『サルバトール・ムンヂ』の表紙の裏貼りとして発見されたもので、全容は不明であるものの、四周単辺で罫線もあり、版心は中黒口と丁付があることが確認できるのである。

刊行年は近いはずなのに平仮名大型活字本に匡郭がないことからすると、文字種の違いが匡郭や罫線の有無と関係していると考えることができよう。年代的にはこれらより若干後になるが、古活字版においても漢字と片仮名のものは匡郭があるものの（罫線については漢字のものには多いが、片仮名のものはないようである）、平仮名のものにはないのである。文字種によって版式に差がある点で共通性があるのは興味深い。

匡郭の無い点で、国字本と古活字平仮名本は確かに共通するのであるが、後者には版心がない点では異なっている。②『どちりいな・きりしたん』が柱題を有するのも不思議だが、④『ばうちずもの授けやう』の版心はまるで匡郭や罫線を有する漢字の版本のもののようである。この版心については、森上修氏が前出の「慶長勅版「長恨歌琵琶行」について（下）―わが古活字版と組立式組版技法の伝来」において、後陽成天皇の命で刊行された慶長勅版が共通して黒三魚尾であり、それが『ばうちずもの授けやう』と一致していることを、同書と『錦繡段』・『日本書紀神代巻』の版心部分の図版まで掲げて指摘しておられる。

古活字版でこのような版心を有するのは慶長勅版のみであるのだが、大内田貞郎氏は「「きりしたん版」に「古活字版」のルーツを探る」において、慶長勅版の魚尾の向きは下上上であり、下下上の『ばうしずもの授けやう』とは一致せず、そこまで一致するものに複数の五山版があることを指摘されて、五山版の職人達が『ばうちずもの授けやう』の印刷に直接携わっていたことを示す証左と考えておられる。この指摘は、森上氏のように『ばうちずもの授けやう』と慶長勅版を直接結びつけて考えることには注意が必要であることを教えてくれるのである。ただし、五山版は中国から輸入された宋元版の覆刻が主体であるので、この魚尾の形式は五山版からしか学べないものではない点にも留意する必要はある。国字本の刊行に際して東アジアの漢字版本に倣う部分があったことに注意すべきなのであろう。

それに対して、慶長三年（一五九八）刊の⑤『落葉集』以降に四周単辺の匡郭が加えられるようになるのは、どの様な理由

によるのであろうか。『落葉集』は漢字字書であり、本編の他に「色葉字集」と「小玉篇」を有していることからも判るように、宋版『大広益会玉篇』を初めとする、当時日本に存在していた字書類を参考にしていたことは明らかである。内容のみならず匡郭や罫線の存在までそれらに倣った可能性はあるのである。

しかしながら、それでは同年刊の⑥『サルバドール・ムンヂ』に匡郭が加えられた理由は説明が付かない。[9] 大字から小字への変化は古活字版にも認められる傾向であるが、先にも言及したように、古活字平仮名本には匡郭は存在しないのであり、この点においては、小型文字本と古活字平仮名本には距離がある。

ただし、視野を整版平仮名本にまで広げると、国字本と同様の傾向が認められるのである。古活字版の影響もあり、整版でも文字のサイズは大きなものから小さなものへと移行していく傾向があるが、整版平仮名本ではこれに加えて、寛永（一六二四～一六四五）後半頃から匡郭が加わり始め、正保承応（一六四五～一六五四）くらいになるとこれがかなり普及し、次の時期になると平仮名本でも匡郭の存在が当たり前になるのである。

平仮名写本に匡郭がなく、版本にそれが当たり前に存在するようになるということは、版本は写本の複製・代用として製作されていたものが、匡郭の存在によって版本であることを主張しはじめたと考えることができよう。[10]

断定的なことは言えないが、同様なことはキリシタン国字本の小型活字のものにも言えるのかもしれない。ここからは臆測でしかないが、キシリタン版が知られるようになり、活字印刷本であることがありがたがられるようになった段階で、積極的にそのことを主張するために、印刷物であることを示す匡郭が加えられた可能性はあるであろう。

五　古活字平仮名本との共通性

以上くどくどしい検証となったが、キリスト教宣教師達が国字の活字を用いた出版を行うに当たって、装訂や大きさ、題簽を含めた表紙の有様、また大型活字本に限定されるものではあるが匡郭がないことなど、当時の豪華な平仮名写本を強く意識して造本を行っていたらしいことが確認できた。

そのことの追証となると思われるのが、これまで注目されていないキリシタン版国字本の下綴の方法である。稿者はこれまでに数点の国字本の書誌調査をした経験があるが、ライデン大

学図書館蔵の⑤『落葉集』を実見した際に、下綴が「紙釘装」であることに気付いた。

紙釘装は、本の綴代部分に縦に幾つかの穴を開け、その穴に紙縒を通して、両側を余らせるようにして切り、その余った部分の紙縒をほぐして、木槌などで打ち付けて釘の頭のような形状にして、穴の両側から挟み込んで固定する綴じ方である。近距離にあけた二つの穴を紙縒りで繋いで結び綴にする「紙縒綴」が、江戸時代の袋綴における一般的な下綴の方法であり、紙釘装は写本・版本（五山版）を問わずに室町期の袋綴に多く見られるものである。ライデン大学図書館蔵『落葉集』も、反故紙の紙縒を用いて三箇所で閉じられていたのである。

同本は洋式の保護表紙が付されたことにより、原表紙の綴じ糸が無くなって下綴を確認しやすい状態になっており、たまたまその事に気付くことができた。表紙のある状態の袋綴では外見で下綴を判断することは難しい。それを確認したい場合には、袋綴の綴じ糸のあたりを親指と人差し指で摘まんで、そのままの形で指を少しずつずらしていきながら、下綴の箇所を把握し、触診でその部分の形状を確認して紙釘装かどうかを判定する必要があるのである。

それでも表紙の紙質や保存状態によって稀に外見から確認できることがある。二〇一五年四月二五日から七月一二日まで印刷博物館で開催された「ヴァチカン教皇庁図書館展Ⅱ 書物がひらくルネサンス」展に、出品されていた⑦『ぎや・ど・ぺかどる』は、表紙の右端の膨らみ具合によりやはり三穴の紙釘装であるらしいことが判った。

確認できたのは僅かに二例ではあるが、作品も異なっているので、この他の国字本にも紙釘装であるものは少なくないものと考えられる。ともあれ、紙釘装のものが確認できる点でも、国字本はあくまでも日本式の装訂をそのまま採用していたことが判るのである。

アルファベット活字の本は、料紙こそ和紙を用いてるものの、造本は西洋式で行ったのに対し、国字活字の場合に和装にしたのはなぜであろうか。日本人に馴染みのある文字であるので、それを保存する書物自体にも、違和感を抱くことなく受け入れやすい造本を心懸けたのであろうか。当然それを行うためには、和本のことを良く識っている日本人が必要となるが、そのような人物が存在したことについては、大内田貞郎氏の指摘された諸キリシタン文献に明らかである（「「きりしたん版」に「古活

字版」のルーツを探る」)。

先にも少し言及したが、国字本が連綿活字を用いていたことも注目すべき点である。[11] 続け書きをする数文字を一つの活字とした連綿活字は、現存最古の平仮名国字本である一五九一年刊の②『どちりいな・きりしたん』で既に用いられており、国字本製作の最初から用いられていたらしい。

これも何度も指摘されていることだが、西洋初の活字印刷本であるグーテンベルク聖書で既に、連続して用いられることの多い数文字を一つの活字とした、「リガチャ（合字）」が多用されているように、この技法は西洋の活字印刷では普通のことであった。このことを知っている者であれば、国字の連綿活字を発想することは特に難しいことではなかったと思われる。

当時の仮名文は連綿体で書かれていたのであるから、仮名文の出版物を用いて日本人にキリスト教の教義を伝えようと考えた際に、違和感を持たれないようにすることは大命題であったはずである。出版と言えば基本的に活字しか意識していない宣教師達にしてみれば、連綿活字は布教を円滑に行うためにどうしても必要な発明であったと言えるのではないだろうか。

この発明によって、仕上がりの程はともかくとして、キリシタン版は写本に似た印刷面を獲得することができたのである。とは言っても、全く写本同様という訳ではないことは、冒頭部分の銅版画や、随所に用いられた西洋的な装飾活字などの存在にも明らかである。これは日本の本と全く同じでないことを示すとともに、エキゾチシズムを掻き立てるためにも必要な要素であったのであろう。

このように国字本の書物としての形態を中心とする性格を整理してみると、強く意識されるのが古活字平仮名本との共通性である。

連綿活字の問題は、先に触れたように川瀬一馬は否定的であったし、鈴木広光氏も『日本語活字印刷史』第Ⅰ部第2章二「キリシタン版と古活字版の連続活字」において、小型活字を用いた後期国字本が、「有意味な単位として切り出したものを活字に載せるだけでなく、植字・組版においても「語」という単位を意識しつつ活字を選択している」のに対し、漢字仮名交り文の古活字版は、「連続文字列の活字化や配字・組版に明確な方針や規範を見いだし難い」との見解を示され、「同時代に行われたのであるから、否定することは不可能」としながらも、質的に大きく異なると両者の影響関係について否定的な立場をとっ

ておられるのである。

連綿活字そのものではないが、干支などの頻出する熟語的な数文字を一つの活字にすることは、朝鮮版にも認められることである。[12] また天台僧宗存が発願して、京都で慶長一八年（一六一三）から寛永元年（一六二四）にかけて、木活字によって刊行された「宗存版」一切経は、用いられた約一五万字の木活字が現存しており、その中に「般若波羅蜜多」や「云々」といった、複数の文字を一つの活字としたものがあることも確認されている。[13]

宗存版はまさに古活字版の時代のものであるが、このような活字はキリシタン版からの影響ではなく、朝鮮版に学んだと考えるのが自然であろう。こうした事例があることからしても、やはり連綿活字は古活字平仮名本がキリシタン版の影響を受けたことの証左と断定することは難しいと考えられるのである。

キリシタン版には先述のように、アルファベット活字本と国字活字本の二種があり、国字本は平仮名を用いて出版する際に日本の写本を意識した造本を行った。このことは特に不思議なことではない。そもそも西洋の活字印刷は写本の覆製を作ることを目的として生まれたものであり、活字のフォントも最初は筆写体を模して鋳造されていたのである。[14] そうした意識があれば、日本語の活字印刷を行う際に、印面を日本の写本に似せようとすることは、ある意味当然なことであったのである。

キリシタン版に遅れて出版が始まった古活字版にも、既述のように漢字活字のものと平仮名活字（漢字混用であるが、漢字のみのものとはフォントが異なっている）のものがある。片仮名活字もあるが連綿しない点で漢字活字と同類と整理できよう。漢字活字は外見的にも朝鮮版の影響が濃厚である。先に言及した小秋元氏のコラムにも、「よく知られるように、初期の古活字版で用いられる活字の字体は、伏見版や嵯峨本『史記』などに見られるように、甲寅字に代表される朝鮮版の字体の影響を受けている。また、古活字版の表紙の文様には、朝鮮版のそれを受け継ぐものが少なくない」と指摘されているとおりなのである。

「朝鮮版の表紙の文様」とは、唐草文など細かな文様を刻んだ版木を用いて、絵の具は用いずにその凹凸を写し取る「空押」という技法によるものである。この空押について、川瀬一馬は『日本書誌学用語辞典』（雄松堂書店、一九八二）の「空押文様」項で、「色紙などに文様の型を叩いて打ち出したもの。慶長以来、

書物の表紙に多く用いた。それは文禄の役の結果多数将来された朝鮮本の影響と思われる」と、興味深い指摘をしている。この空押し表紙は、日本の一七世紀の版本や写本で盛んに用いられており、朝鮮版が古活字版に限らず、日本の書物に多大な影響を与えていたことを示す端的な事例であると言えるのである。[15]

もう一つ古活字版における朝鮮本の影響を示す存在として知られているのが、版心の魚尾である。慶長勅版は先述のように版心に三黒魚尾がある点で例外的であるが、初期の漢字の古活字版は朝鮮版に特徴的な花魚尾を有するのが普通である。一五世紀の朝鮮版に黒魚尾のものも確認できるが、[16]三魚尾であることからしても、慶長勅版は『錦繡段』の刊語を南禅寺の玄圃霊三が認めているように、版心については五山版を意識したものかもしれない。ちなみに玄圃は秀吉の帰依を受け、外交僧として文禄の役にも従軍している点も非常に興味深いものがある。

このように初期古活字版は、朝鮮本をある程度知っている者が見れば、その影響関係を容易に把握することができるのである。しかしながら、古活字版は朝鮮本を忠実に模しているわけではない。朝鮮版は王の命で刊行されたものが中心的な存在であり、王の威光を示すために特大サイズのものが多く、表紙の色は五行説で中央を示す黄色系で統一されている。また綴目は明版が四目であるのが一般的であるのに対して、特大であるためもあってか五目であり、日本ではこの形式を「朝鮮綴」と呼ぶほどの特徴となっている。これに対し日本の初期古活字版は、朝鮮版ほどの大きさのものはなく、表紙も空押であっても黄色系のものは非常に少なく、五目のものも思いの外に少ないのである。[17]ちなみにキリシタン版国字本も元装が判明するものは四目綴である。また朝鮮版には基本的に題簽はないが、先に言及した嵯峨本『史記』のように古活字版には題簽を有するものもあるのである。

古活字版は朝鮮に技術を仰ぎながらも、その初期から日本化することを行っているのである。その方向性を推し進めたのが他ならぬ古活字平仮名版である。『増補古活字版の研究』には、慶長元年（一五九六）頃には暦日が存在していたらしいことが報告されており、慶長九年刊の『徒然草（寿命院）抄』と同一〇年刊の伏見版『東鑑』の部分的な使用があるのを経て、平仮名本が広まっていく様子が報告されている。その完成形として注目されるのが、慶長一三年（一六〇八）刊の所謂「嵯峨本伊勢物語」を代表とする、角倉素庵が刊行した「嵯峨本[18]」であり、

古活字平仮名本の初期の様態を知る上で非常に重要な存在である。これらを見れば明らかであるが、匡郭を有さず、連綿活字を用いた手書きに見える印面、雲母刷文の具引き紙表紙に題簽があるなど、写本と見まがうばかりの造本がなされているのである。『方丈記』や「光悦謡本」など、朝鮮版ではありえない綴葉装のものまで刊行していることは、この装訂が袋綴よりも伝統的で格の高い装訂であることからしても、高級写本を強く意識していることは疑いない。[19][20]

そしてこの傾向や意識は嵯峨本のみのものではない。慶長一八年刊の所謂「烏丸本徒然草」は、光広自筆版下の整版刊語のみならず、本文部分まで古活字版としても特殊な非規格の活字を用いて光広の書風の再現を試みているのである。[21]これなどは、「嵯峨本伊勢物語」の慶長一三年版に中院通勝（也足叟）自筆版下の整版刊語が加えられ、最初期のものには自筆花押まで書き込まれているところから更に進んで、烏丸光広筆『徒然草』写本の覆製を目指したものと言えるであろう。

こう見てくると、同じ古活字版と言っても、漢字（片仮名）本と平仮名本は書物としての性格が大きく異なることが理解できる。漢字（片仮名）本が朝鮮本の影響を受けつつ目指したのは、活字印刷本であることを全面的に打ち出すことであった。これに対し、平仮名本はどこまで写本に近づけられるかに精力が注がれていたのである。

この二つの方向性は、東洋の印刷と西洋の印刷の本質的な性格の差と等しいのではないだろうか。東洋の印刷は、匡郭や罫線の存在が象徴するように、写本と異なるものを目指した存在であると言える。徹底的な本文校訂を経た信頼性の高い本文を版木に刻むことによって、均一な本文を広く行き渡らせることを意図したのである。宋元版が今日でも高く評価されるのは、本文の信頼度の高さもあってのことである。これに対し、写本は転写の過程で誤写が起こりやすく、不純な要素を孕む存在として嫌われたのであった。活字印刷を発明しながらも、中国国内において朝鮮半島ほどに普及しなかったのも、一般的には文字種が多くてその製作や保管が大変であったためと説明されることが多いが、誤植が生まれやすく写本と同様に不純な本文を広めてしまう可能性を嫌ったためではないだろうか。朝鮮半島で金属活字印刷が中心になったのは、同一内容の書物の必要部数が中国よりも圧倒的に少なかったので、使い回しができて多くの種類のものを刊行できることが尊重されたためであると考

えられるのである。

西洋の印刷は先にも記したように、写本の覆製製作を目指して生まれたものである。古活字平仮名本は、東洋の印刷としては異質な性格を有している（目的を異にする書道の模刻本などは除く）のであり、西洋の印刷に近い存在であると言えるのである。ではそのような性格はどの様にして獲得したものなのであろうか。

匡郭の無い大型活字の国字本や、雲母刷文表紙や色紙題簽を有する小型活字の国字本などの存在を確認した目から見ると、嵯峨本を代表とする初期の古活字平仮名本がこれらとは全く無関係であるとは思えなくなるのである。朝鮮活字印刷の技術を得て漢字片仮名の印刷が可能になった日本人が、平仮名の印刷もできればと願うのは自然の流れであったはずである。その際に既に存在していたキリシタン版国字本を目にする機会があれば、当然それを手本にすることを思い付くのではないだろうか。連綿活字という存在は国字本の版面を見れば容易に気付くであろうし、それを真似ることも容易いであろう。全体をより日本の写本的に仕上げることも難しいことではなかったはずである。

古活字版の製作者が国字本を目にしたという確実な証拠はない。しかしそれを証明するかもしれない魅力的な説が存在している。それは林進氏が「嵯峨本『伊勢物語』の挿絵における西欧銅板画の影響について」（『阡陵』五一、二〇〇五・九）や、「嵯峨本『伊勢物語』（慶長十三年版初刊）の誕生〈下〉―その挿絵とキリシタン画家・狩野一雲」（『日本古書通信』九七五、二〇一〇・一〇）等で述べられた、「嵯峨本伊勢物語」の挿絵が西洋の銅版画の影響を受けているとの説である。

林氏は、川崎博氏が「研究資料 嵯峨本『二十四孝』の挿絵作者について(上・下)」（『國華』一二三八、一九九八・一二、一二四〇、一九九九・二）において、狩野永徳の弟子の一雲が嵯峨本の『二十四孝』と『伊勢物語』の挿絵を描いた人物である、との資料を紹介されたのを受けて、一雲がキリシタンであったとの説も含めて、その可能性について検討され、「嵯峨本伊勢物語」の挿絵の「天空・雲霞に見られる横筋細線の手法」が、西洋銅版画に学んだものである可能性を指摘されたのである。

「挿絵の版の彫りは素朴」であることから「嵯峨本伊勢物語」の慶長一三年以前の刊行であると、川崎氏も推定されている嵯峨本の『二十四孝』は、平仮名を用いてはいるが整版であり、唐本に多く見られる上図下文形式を有し匡郭もあるものである。

またその挿絵には林氏の問題とされた「横筋細線」は確認できないのである。

「嵯峨本伊勢物語」は日本の書物史上極めて特殊な存在である。そもそも冊子本に挿絵が入るようになったのは室町後期頃からのことであり、[22] 冊子の平仮名版本に初めて挿絵が入ったのがこの「嵯峨本伊勢物語」なのである。[23] 確かにその挿絵の雲霞部分には、銅版画の影響を思わせる横方向の細線が確認できるのであるが、それをキリシタン版の扉絵からの影響と断言できる訳ではない。しかし豊後の侍の出で長崎に住したキリシタンであったという一雲が、キリシタン版に接した可能性は大きいとみることは許されるのではないだろうか。嵯峨本刊行より二年の後ではあるが、京都の原田アントニオ印刷所で⑪『こんてむつす・むんぢ』が刊行されている事実は、古活字版が製作されていた京都の地で、キリシタン版がある程度流通していた可能性を示していると言えるであろう。

結局、明確に証明できる訳ではないが、考察をすればするほど、古活字平仮名本の成立にキリシタン版国字本が影響を与えた可能性は高いとの印象が稿者の中で強まっていくのである。

おわりに

古活字版の起源は朝鮮版なのか、キシリタン版なのかという、様々な研究の蓄積がありながら中々決着をみることのない難問について、装訂や造本に注目するという方法で稿者なりに挑戦したのが本稿である。ここで得られた結論は日和見的なものであるとの謗りを受けるかもしれないが、謂わば折衷説である。

初期の古活字漢字本は、表紙、活字のフォント、版心のデザインなど様々な点において朝鮮版的な特徴を濃厚に有している。慶長勅版の刊語の記述は非常に納得できるのであり、仮に組版方式が異なるとしても、その関係を否定することは不可能であると思われるのである。

ところが、同じ古活字版であっても平仮名本は、空押表紙のものもあるが、版面の印象は朝鮮本とはかなり距離があるものとなっている。嵯峨本に漢字本と平仮名本の両方があるように、その印刷の技法においては基本的な部分で共通しているはずであるのに、両者には性格的な差が大きいのである。平仮名文を印刷したいとの熱意が生み出した変化だと考えることは簡単で

あるが、古活字平仮名本に先立って出版されていた、キリシタン版国字本と造本において共通性が高いことも事実なのである。両者の性格の近さは単なる偶然とは考えがたいのであり、「嵯峨本伊勢物語」の挿絵に西洋銅版画の技法の影響を認めるという説の存在は、その思いを一層強くさせるのである。

両者の関係について、活字の製作方法や言語文字に対する認識のあり方の面から否定的な見解を示された鈴木広光氏は、「「延長」や、またよくいわれる「影響」には、発想が同じだったりヒントを得たりといったレベルから、同じやり方を学んだり実行したというレベルまで幅がある」（『日本語活字印刷史』第Ⅰ部第2章二「キリシタン版と古活字版の連続活字」）と、従来の研究における「影響」という語の定義の曖昧さを突いておられる。たしかに様々なレベルでの関係を全て同列に扱うのは問題であるが、この指摘は影響というものには様々なレベルがあるということを思い起こさせてくれるのである。

古活字版は漢字本においては、朝鮮版のやり方を学んでそれをかなり忠実に実行し、平仮名本を刊行しようとする際に、キリシタン版国字本にヒントを得て目的に適した改良を加えたと考えられるのではないだろうか。こうした影響関係であるならば、技術的な面で国字本と平仮名本に共通性が低いことも不思議ではないであろう。

印刷技術の問題や、言語学的な問題についての認識や理解が不十分なままに、狭い窓からの視点を優先して導き出した結論が、御都合主義なものであることは重々承知しているし、この見解で問題が解決するわけでもないことも理解している。しかし、従来あまり検討されていない側面からの考察が、この問題の最終的な解決に幾分なりとも貢献することもあると信じて、敢えて愚考を提示した次第である。

注

（1）日記記事には活字印刷であることは明記されていないのだが、その時期と後述する慶長勅版の存在などから、文禄の役で奪った李朝銅活字と器具を豊臣秀吉が後陽成天皇に献上し、それを用いて出版が行われたと考えられている。

（2）「ミュンステルベルヒ氏」とは後に *The Japanese Print: A Historical Guide* (1982) を著した国際基督教大学に赴任したこともある東洋美術史家の Hugo Munsterberg (1916～

1995）のことであろうか。父はドイツ出身ではあるが、アメリカ生まれであるのと、時期的に微妙であるので、異なる人物である可能性がある。南明日香氏「東洋美術史家ヒューゴ・ムンスターバーグ（1916-1995）の軌跡―中国古代美術から日本の民藝まで」（『相模女子大学紀要』七七A、二〇一四・三）を参照した。

（3）キリシタン版国字本の情報については、天理図書館編『きりしたん版の研究』（天理大学出版部、一九七三）と、折井善果・白井純・豊島正之氏釈文・解説『ひですの経』（八木書店、二〇一一）や、天理図書館編『天理図書館蔵きりしたん版集成』八木書店、一九七六）、『キリシタン版精選』（雄松堂書店、二〇〇六）などを参照した。本稿の内容を確認する際には、『きりしたん版の研究』の図版を参照いただきたい。

（4）例えば伝本の多い⑦『ぎや・ど・ぺかどる』は、天理大学図書館本は二六・〇×一九・四糎、マノエル文庫本は二五・六×一九・〇糎と、伝本により高さにかなり差があるのである。

（5）『キリシタン版の研究』には、「藍色の草模様」と記されているが、酸化した銀泥ではないだろうか。

（6）拙稿「冊子本の外題位置をめぐって」（『日本古典書誌学論』笠間書院、二〇一六）を参照いただきたい。

（7）版心にある魚の尾の形に似たものが「魚尾」で、色の黒いものが「黒魚尾」、白いものが「白魚尾」、黒魚尾に花びらのような模様があるものを「花魚尾」と呼ぶ。版心内部が白いものが「白口」で、黒い部分があるのを「黒口」と呼び、黒い部分の幅（両側の白い部分の太さでもある）により呼び方も異なる。線状であるのが「線黒口」で、太くなるに従い、小・中・大黒口となる。版心にある書名を「柱題（版心書名とも）」と言い、丁数を示す数字を「丁付」と呼ぶ。

（8）この他③「祈禱文断簡」は④『ばうちずもの授けやう』と同活字であることが『キリシタン版の研究』で指摘されている。

（9）平仮名写本で枠線のあるものとしては、元暦元年（一一八四）以前写の所謂「元暦校本万葉集」（断簡は伝宗尊親王筆「有栖川切」）や、治承元年（一一七七）藤原教長写の『古今和歌集』（断簡は伝飛鳥井雅経筆「今城切」）、あ

るいは伝寂蓮筆「右衛門切本古今和歌集」等の平安末の写本が確認できる。しかしこれらからの影響は考える必要はないであろう。

(10) この匡郭の問題については、拙稿「日本語の文字種と書物の関係について」(『日本古典書誌学論』)を参照いただきたい。

(11) 連続活字に関する近時の論文に、白井純氏「キリシタン版の連綿活字について」(『アジア・アフリカ言語文化研究』七六、二〇〇八・九)がある。

(12) 李載貞氏(李仙喜氏訳)「韓国国立中央博物館所蔵活字の意義」(『アジア遊学一八四 日韓の書誌学と古典籍』勉誠出版、二〇一五・五)に、書名や干支を一つにした木活字の例が紹介されている。

(13) 同活字については、三井田妙久氏「宗存版木活字について」(『叡山学院研究紀要』二三、二〇〇一・一)、水上文義氏「新指定重文・延暦寺蔵『宗存版木活字』について」(『天台学報』四三、二〇〇一・一一)を参照いただきたい。

(14) リュシュアン・フェーブル、アンリ・ジャン・マルタン著、関根素子訳『書物の出現 上』(筑摩書房、一九八五)にも、「最初にはっきりさせておきたいのは、初期の活字本の見かけが写本と全く同じであった事実である」、「揺籃時代、印刷業者は革新を行うどころか、ひたすら写本の模倣を目指していたのだ」、「写本の書体と同じく連結線でつながった合字が長いこと使われていたことになる」などと記されている。

(15) この技法や表紙については、拙稿「日本古典籍における近世初期の表紙の変化について―朝鮮本と和本を繋ぐもう一つの視座」(『アジア遊学一八四 日韓の書誌学と古典籍』勉誠出版、二〇一五・五)を参照いただきたい。

(16) 韓国図書館学研究会編『韓国古印刷史』(同朋舎、一九七八)に見える、一四三四年に鋳造された初鋳甲寅字を用いた『分類補註李太白詩』は、上下下向きの黒魚尾である。

(17) 古活字版の書誌データについては、高木浩明氏「古活字版悉皆調査目録稿(一)(現在八まで)」(『書籍文化史』一一〜、二〇一〇・一〜)を参照いただきたい。

(18) 素庵と嵯峨本については、最新の成果として、森洋久氏編『角倉一族とその時代』(思文閣出版、二〇一五)を挙げておきたい。

(19) 拙稿「日本古典書誌学論序説」『日本古典書誌学論』を参照いただきたい。

(20) 林望氏「嵯峨本の夢―『嵯峨本考』の改題にかえて」(『典籍図録集成Ⅰ 嵯峨本考』(名著普及会、一九九二)、大内田貞郎氏「「きりしたん版」に「古活字版」のルーツを探る」(『活字印刷の文化史』勉誠出版、二〇〇九)、高木浩明氏「古活字版伊勢物語の世界」(『伊勢物語版本集成』竹林舎、二〇一一)など、古活字平仮名本が写本に似せて製作されたことに関する言及は少なくない。

(21) 烏丸本については、山田健三・伊東莉沙氏「烏丸本徒然草の印刷技法」(『信州大学文学部人文科学論集(文化コミュニケーション学科編)』四六、二〇一二・三)を参照いただきたい。この論文では、嵯峨本が規格活字駒印刷法であるのに対し、烏丸本は非規格活字駒印刷法を用いており、その点で「むしろキリシタン版の技術系統と見ることが可能である」との興味深い指摘をされている。ただし、「これは烏丸本の印刷技術が、キリシタン版印刷技術の直接の影響下にあった、ということを直ちに意味するわけでない」と付け加えられていることは注意が必要であろう。

(22) 拙稿「絵巻物と絵草子―挿絵と装訂の関係について」(『日本古典書誌学論』)を参照いただきたい。

(23) 拙稿「日本の絵入り本の歴史―絵本が出版されるまで」(『出版文化史の東西 原本を読む楽しみ』慶應義塾出版会、二〇一五)を参照いただきたい。

《付記》 本稿は、平成二八年九月五日に国文学研究資料館で開催された、国際型共同研究「江戸時代初期出版と学問の綜合的研究」第二回研究会で発表した内容を元に、大幅に手を加えてたものである。席上貴重な御意見を賜った方々に御礼申し上げたい。